

はは けっこんしき
母の結婚式

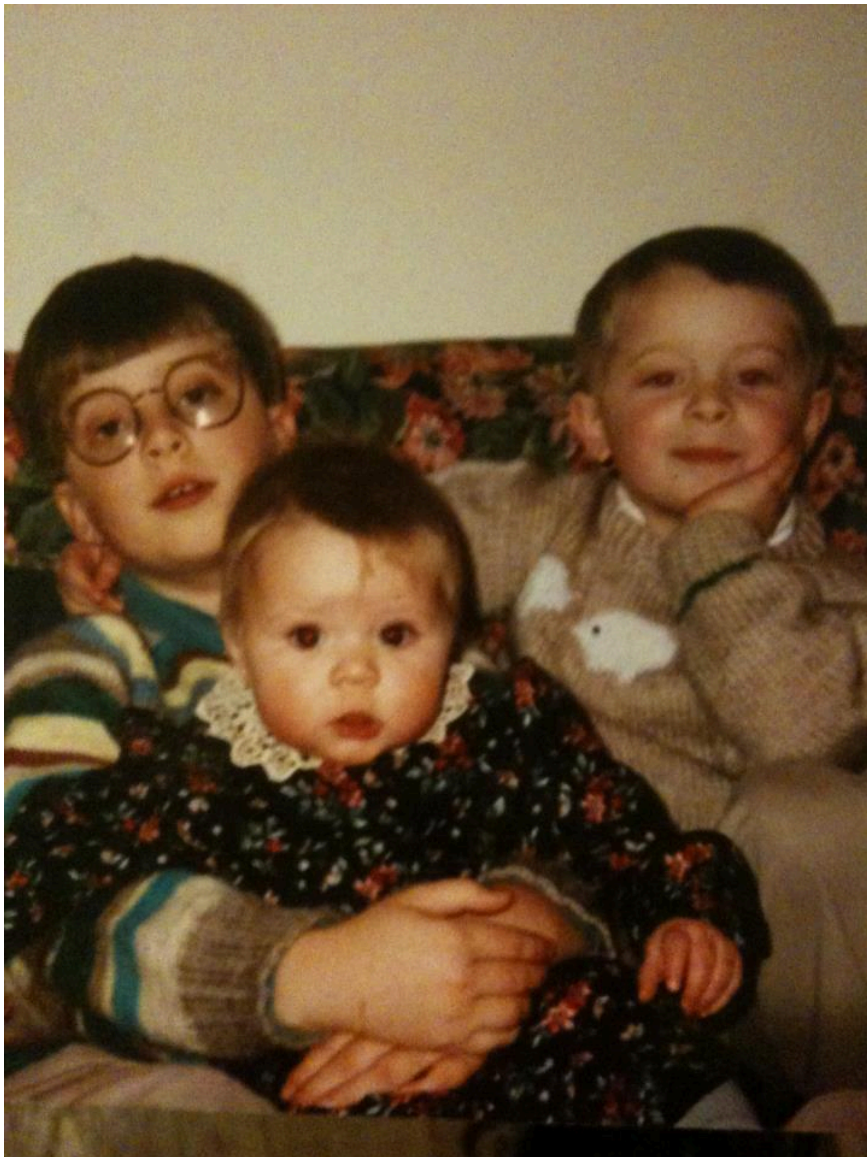


ルーシー・バウアー

わたしは母と父と二人の兄がいて、私が生まれた時は5人家族だった。そして、一歳の時、両親が離婚した。

私は両親が結婚していた頃を覚えていないので、それは悲しいことではない。たいてい母の家で過ごして、週末は必ず父の家へ行った。みんな同じ町に住んでいて、私はとてもラッキーだと思ってきた。家が二つあったが、私の考えでは一つの幸せな家族だった。

でも、八歳の時、母が他の男の人と結婚した。リックという背が高く、静かな人だった。リックは時々、2、3ヶ月間遠いところに仕事をしに行った。そして、家にいる時は、コーラを飲んでゲームをしてばかりいた。私と兄たちとはあまり話してくれなかった。



わたしはリックがあまり好きじゃなかったが、彼がいても私の生活は別に変わらなかつた。私は幸せな家族がいるとずっと信じていたからだ。

高校二年生の秋のこと。兄たちはもう家に住んでいなかった。そしてリックはその月、遠い州で仕事をしていたら、彼も家にいなかった。

私はある日、学校から帰ってくると、母に「話がある」と言われた。

「うん、いいよ。でもちよっとお菓子を食べてからでもいい？私、すごく疲れているんだよ。後で話してもいい？」と、私は答えた。



でも、母は私の名前を呼んで、「今、話さなきゃいけないの。」と笑わないで言った。

私は急に、これは深刻な話だということに気づいた。母はソファに座っていたので、私も静かにソファの向こう側に座った。そして母の顔を見た。不思議な顔で、母はもしかして何か怖がっているのではないか、と思った。

「お母さん、どうしたの？」と私が聞くと、母は深呼吸をした。

「実は、リックと離婚することになったの。」

「えっ？」私はびっくりした。そして、母は続けてこう言った。

「あと、あのね……私は、他に好きな人ができたの。」

「えっ？だれ？」

「……友達サラよ。」

「えっ？サラ？」

「そう、私の女友達のサラ。」

わたし だま
私は黙って、母を見つめた。

「サラを覚えてる？一回うちに来たがあるけど。」

わたし
私はうなずいて、笑おうとした。「覚えてるよ！よかったね。リックと別れるなら。」

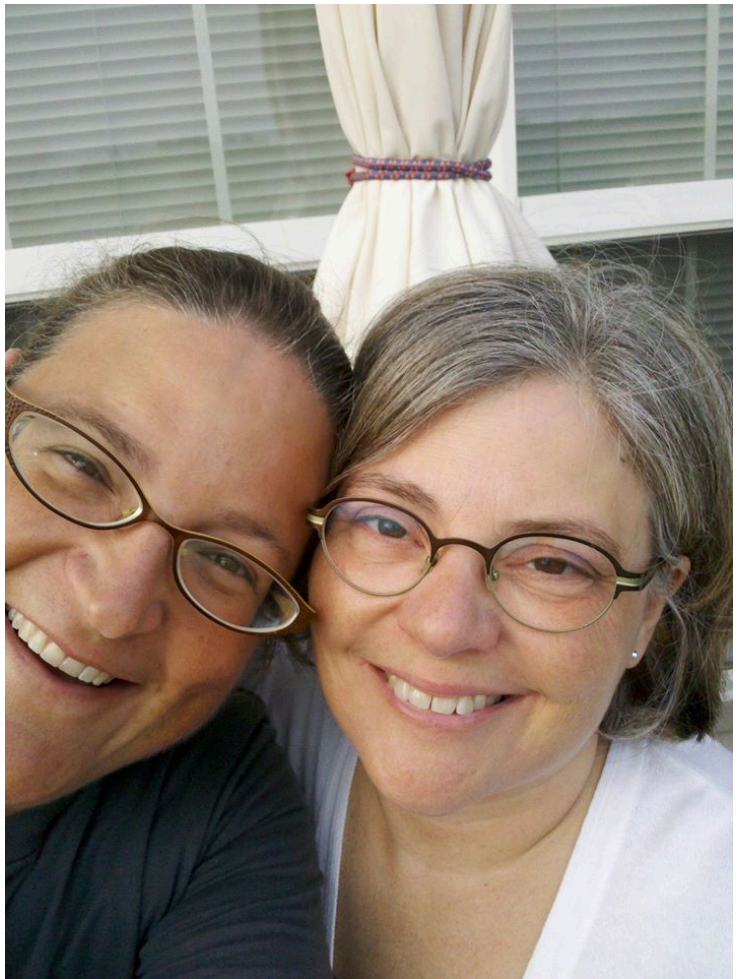
なが はなし
長い話になった。母はサラが好きだとわかると、そのことも、自分は女性が好きだということも、リックに伝えなきやいけなかった。

でも、リックは母に本当のことを言われて、こういうふうに答えたそうだと。

「あんたが悪いんじゃないやなくて、俺の方が悪いんだ」と。リックは本当は、もう何年間も母のことを大事にしていなかったからだ。

はは な
母は泣きながらこの話をしているうちに、私はだんだん腹が立ってきた。

信じられなかった。母は男の人しか好きにならないとずっと言っていたのに、それは違った。今までの母の結婚は、嘘からできていたのだ。他人につく嘘と、自分につく嘘と。



でも、この話を聞いて、絶対に母が悪いとは思えなかった。

サラも母と同じで、牧師だった。私は数年前に一回サラに会ったことがあって、いい人だと思ったが、まだまだ、どんな人かわからなかった。

サラはジェーミーという6歳の息子と一緒に、遠い州に住んでいた。だから、私はまたサラに会うまで、二ヶ月待たなければいけなかった。クリスマスの後の一週間、母と二人でサラの家へ遊びに行った。

最初はやはり少し気まづかったが、みんなだんだん仲良くなった。サラは、リックのように背が高かったが、全く違う性格だった。明るくて元気な人で、サラが母を見つめているところを見たら、母に恋をしているということがすぐわかった。サラを嫌いになれるわけがないと私は感じた。

わたしとジエミーちゃんは一緒にゲームをしたり、パソコンのカメラで写真を撮ったりして、遊んだ。ジエミーちゃんも他の家に住んでい
るお父さんがいたから、私のように感じ
た。

次のクリスマスや感謝祭に、兄たちもサラとジ
エミーちゃんに会った。みんなで楽しい思
い出を作った。だんだん家族のようになった。

二年后、母とサラは結婚することにした。サラ
とジエミーちゃんが本当に私の家族になる
と思うと、私はとても嬉しかった。



でも、その時はまだ、女の人は女の人と結婚してはいけない州がたくさんあった。だから、結婚式は他の州で、ケリーという牧師である友達の教会で行われた。

みんな素敵な服を着て、素敵な結婚式になった。たくさんの人が泣いた。結婚式の終わりが、みんなで丸の形をして立って、母とサラのために何か言いたい人がいれば言ってもいい、という機会があった。その時、一番上の兄が言った。

「いつだったかは覚えていないけど、僕はある日、サラさんの家にいる時、サラとお母さんを見ていると、「この人なら大丈夫なんだな」と思った。「兄が言わなかったのは、これまでの恋人が母にとって物足りなかったということだ。私たちが優しく強いお母さんにはもう一人の素晴らしい人が必要だった。」



私たちが優しく強いお母さんにはもう一人の素晴らしい人が必要だった。



サラは涙を吹きながら、うなずいて、兄に
「ありがとう。その話をずっと覚えてお
く。」と言った。

小さい結婚式で、ちょっと遠い州だったか
ら、私の父もジェミーちゃんのお父さん
も来なかった。でも、お父さんたちを忘れ
たわけではない。「家族」は同じ場所にい
なくても、家族だから。私の家族はユニ
クな形をしているが、壊れてはいない。

結婚式の後、母はサラの家に移り越して、
私は大学に行くまで半年父と過ごした。今

は大学だいがくの休やすみに母ははの家いえに帰かえると、母ははが二人ふたりいて、弟おとうともいる。

最初さいしょは、サらがもう一人ひとりのお母お母さんになると思おもわなかった。でも、今いまは私わたしの世話せわをしたりアドバりイスをしたりりしてくれる、つまり愛あいしてくれらる両親りょうしんが三人さんにんもいて、とてもララッキーだと思おもう。

そして母ははも、自じ分の心こころがわかるようになって、本ほん当とうに愛あいし合あえる人ひとが見みつかってよよかったと、私わたしは、いつも、そううれしく思おもっている。

今いまの社しゃ会かいには、いろいろろな家か族ぞくがああって、どどんな形かたちも大切たいせつだと思おもう。大たい変へんなここともああるだだららうけけれれど、家か族ぞくの間の愛あいでも、恋こい人びとの間の愛あいでも、その気き持もちを尊そん重ちゆうしなしなないいけけなない。

